

「難中の難」ということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」が昨年12月、第137回をもって終了した。2023年1月からは親鸞『一念多念文意』の連続講座を開始している。ここでは、「浄土を求めさせたもの」の最終回（第137回）から、その一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

「もしこの経を聞いて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」（東本願寺出版『真宗聖典』〔以下『聖典』〕、87頁）。有限の身を生きるということを取り巻いてくる因縁が、いろいろ変わってくる。無限に変わりゆく状況に、我々も無限に変わりゆく命を生きている。心も変わりゆく。無限にあり得る因縁が、有限の形を取って我々には与えられる。我々はそれをなかなか受け止められずに、苦しみ抜いてしまう。そういう苦しみが起こるわけですが、そこで本願念仏の催しというものに触れずしては、有限がまた迷わされてしまう。

念仏に触れたということは、ある意味で、光明摂取の利益に遇ったということです。阿弥陀の心の光が常に護っている。常に光が護っているということを、我々はいただいているのだと言いながら、我々はそれを忘れてしまう。「煩惱眼を障えて見たてまつるにあたわずといえども、大悲倦きことなくして常に我が身を照らしたまう」（『聖典』、222～223頁）という源信僧都の教えの言葉を、親鸞聖人は『教行信証』の信巻で引文されています。信心を得ていても、我々は忘れる。忘れて生きてしまっている。これが現実の有限性を生きている凡夫の実相です。

我々からすると自力の思いがまた復活してし

まって、自力で切り抜けていこうとするものだから、その自力の思いには大悲の光は見えない。けれども横からはたらく、こう言わざるを得ないような大悲のはたらき方がある。見えない形でもはたらいているということに気づかされる。これに気づく縁が南無阿弥陀仏で、大悲が有限になってはたらいている。名号のはたらきは、無限がはたらくという意味をもっているから、無限が有限を転じて、無限の心に直していく。けれどもまた我々は大悲を忘れて有限の心を生きてしまう。だから名号を一回称えたらそれで済んだとは言えない問題が常に起こっている。

だから、念仏を信ずるといっても、一回称えたらいいとか、多く称えなければならぬとかというのではなくて、念々に煩惱とともに生きているというところに、念々に称名がはたらいてくる。そういう形で「難中の難」という問題もある。難があるけれども自分は乗り越えた、簡単にそうはなれない。「難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」。どこまでも凡夫であるという困難性。如来の大悲からすれば、困難でも何でもないけれども、我々凡夫では凡夫性を抜けることはできない。だから念々にこの本願他力の催しに触れて目覚めていく。そういうことが教えられているのだらうと思うのです。

これまで『無量寿経』を私のつたない理解で拝読させていただきました。親鸞聖人の教えを明らかにするべく、本願の文をできるだけ丁寧に読みほどこいてみようかと思って始めたことでありました。長い時間がかかりましたけれど、いったんここで『無量寿経』の文章の理解という形では終わらせていただきたいと思います。